

「わからないけど、おもしろい時代だね」

～変化できる者を育てるために～

2026・7・22 重枝 一郎

今、学校にいる生徒たちの日常を、私たちはどれほど解像度高く想像できているだろうか。生徒たちはスマホネイティブで、身体の一部のようである。リアルな友情とネット上のつながりの区別がつきにくい世界に生きている。今の生徒にどんな教育を・・・。

今、私たちが直面している課題として、AI との共生がある。単なる「便利なツールの登場」ではなく、「人間とは何か」「学ぶとは何か」という根源的な問いを突きつけられている。ほんの少し前までは、テクノロジーへの期待先行だったフェーズは終わり、今では、人間中心のシステム構造そのものを塗り替えようとしている。誰かが、「これまでの当たり前が、AI によって死を迎える」と言った。何か、ノストラダムスの大予言とは違う感覚で、不安感が高まる。世の中が変革すると、世の中が求める人材像も変換される。しかも劇的な変換だと思う。

私たちは長年教育現場で「マニュアルの達人」を育てていたのかもしれない。これまでの優等生像は AI エージェントに、最も取って代わられやすい層になる。（※AI エージェント：指示を与えれば、人が介入することなく、自らブラウザを開き、メールを送り、資料を作成し、システムを操作して仕事を完結させる「自律的な実務者」のこと）では、生き残る人は、AI のやったことの責任を取り、AI には読み取れない人間心理の機微を汲み取って意思決定できる人になる。

例えば、能登半島地震の際、行政は平等・公平の原則を崩せないやり方になる。一方で、個別の切実なニーズに対応したのは、多くの NPO や民間企業の若者だった。被災者それぞれのニーズや復興への熱量が、その人たちに共感され、クラウドファンディングやボランティアの行動へと変わった。行政の平等性とは異なる、個人への「共感」が課題解決の強力なエンジンとなった。この「共感のネットワーク」を使いこなしているのは今の若者である。今の若者は、「ネットという武器」を使い、リアルな世界での経験と融合させて、自分のやりたいことを実現できる。そう考えると、私たちは、「共感する力」を育む教育環境であったり、経験を手に入れる教育環境であったりすることを意識するということになる。

以前、校長研修だより 170「壁を階段に変える力」でも書いたが、これからは、「想像力」と「共感力」が重要になる。この力を付けるには自らの経験を深くしていくしかない。経験する中で壁に必ずぶつかる。だから「壁を階段に変える力」という話である。

こういう変革の話をする、私たち教師や保護者の不安や戸惑いを生む。「これまでの成功法則は通用しない？」「AI を使わせると学力低下？」「我が子は変化に耐えられる？」・・・当然だと思う。でも、間違いなく言えるのは、「親が安心できるルールを敷くことより、ルールがなくても歩ける足腰を育てる」ということになる。

どんな教育か想像してみる。泥にまみれても他者を助ける「共感力」、うまくいかなくて、みんなで落ち込んでも、それでも次の問いを探す「泥臭い粘り強さ」。これは、いわゆる「非認知能力」である。AI 時代に最も価値が高まる力になる。

私たちは生徒に対してどう語っていくか。まずは、教える・教えられるという壁を取り払い、学校を共に学ぶコミュニティにする。そして、私たちは生徒に「わからないけど、おもしろい時代だね」と、一緒に面白がる姿を見せていく。この姿勢が、先の未来を明るく照らす。進化論のダーウィンの「最も強いものが生き残るのではなく、最も賢いものが生き残るのでもない、唯一生き残るのは変化できる者である」の言葉は有名である。そのマインドセットを本気でしていく。